新刊紹介

宮崎市定著

東洋に於ける素朴主義の民族と文明主義の社會

支那歴史地理叢書第四

古來、滿蒙の地に興起した一連の北方族と南方支那本部を占めて居つた漢族とが相對抗してゐたことは、永い東洋史上に一貫した顯著な事實にして、ある意味では、東洋史はこの南北兩民族の對立・交渉の上に成立してゐるのであつて、このことは今迄學者のよく說かれるところであつたが、著者は更に竿頭一歩を進めて、かうした事實を、素朴主義の民族と文明主義の社會との對立・交渉として考察されてゐるのである。

北方族は沙漠・草原地帶の氣候風土に惠まれない生活環境から、强烈な素朴的精神力と優秀な武力とを體得して居るのであり且それによつて南方文明主義の漢族社會に侵入して略奪し、さては居坐つて之を支配し、以て猛威を振ふのが常例であつた。かくて北方族の漢人統治が行はれるのであるが、しかも、彼等素朴主義の民族は、文明主義の社會卽ち漢地には入るや、彼等の缺點を遺憾なく暴露して、文明主義社會の魅力に惑溺し、素朴な精神力と武力とを喪失し以て彼等の國家までも解滅に至るのが又常例であつた。

これを南方文明主義の社會から云ふならば、漢族は惠まれた氣候・風土とそれに由來する豐かな物資とによつて、文明主義の社會を建設してはゐるがその武力は常に弱く、北方族の絕えざる脅威を感じなければならなかつた。漢族が北方族の重壓に如何に苦しめられたかは蓋し想像以上のものがある。されど、文明主義の漢族社會は、北方族の武力の前に一時は屈しても、やがては彼等を自己の內に同化せしめて、彼等の國家を內部より崩解せしめて、又己の天下となすに至るのであつた。これ文明主義の漢族社會の特徵たる同化作用であるが、又新なる北方族が勃興すれば、その脅威にさらされるのが漢族社會の運命であつた。

かくの如く、素朴主義の民族と文明主義の社會との對立交渉を發展の樣相に於て考察されてゐるのが本書である。透徹した史觀の下に東洋史上の百般の現象を考察し說明された著者の鋭眼は、その流麗な筆致とともに、讀者を惹きつけずにはおかない。東洋史に關する概觀的な書物は少くないが、かくの如く獨特な考察を施されてゐるものは、他には殆んど見受けられない。

鴛淵　一著

奉天と遼陽

支那歴史地理叢書第六

國運を賭して戰つた日露の役の戰場として我々の腦裡に燒きつけられてゐる奉天と遼陽とは、又現在滿洲國に於ける代表的な歴史の都會でもある。實に、奉天と遼陽との永い史的變遷は、そのまゝが滿洲史の縮圖であり、奉天と遼陽とを除外しては、滿洲史は考へ得られないのである。

滿洲史の造詣の深い著者はこの二都市をとりきたつて縱橫に解剖し、以て歴史的背景の中にその全貌を畫き出されてゐる。特に淸朝の興起と兩都市との關係を解明されるあたり、著者獨自の見解の滿されてゐるところであらう。兩都市現存の史蹟に就いて適切なる說明のあるのも讀者には至極便利である。

なほ、本叢書には、前號に紹介した二册と右の二册の外に北山康夫著『北支那の戰爭地理』・曾我部靜雄著『開封と杭州』及び史上甚だ不鮮明な蒙古の古代に斧斤を入れられた內田吟風氏の『古代の蒙古』のあることを附記する『(富山房發行各册壹圓貳拾錢)—N—

西尾　京雄著

佛地經論之研究

本書は二卷より成り、第一卷には西藏譯の『佛地經』、戒賢造『佛地經論』の本文、及び『佛地經』・『佛地經論』並にラーデル氏の『十地經の語彙』に基づく西藏語の索引が收められ、第二卷には、「第一、佛地經の成立考」としての「一、佛地經と莊嚴經論著提品」・「二、無着造解深密經疏に就て」の二論文、「第二、唯識教學に於ける佛地經の系統」・「第三、戒賢造、佛地經論の研究」の三編を收め、更に第一卷所收の佛地經、佛地經論の和譯が第四・第五編として收錄せられてゐる。

從來、大乘經典の成立を論ずる際には一般的傾向としては、先づそれの漢譯せられた年代を以て大體を定め、次に若し同一經に數種の異譯ある場合にはそれら異譯を、同一思想の下に置き簡單から複雜へと增廣發達するのが思想一般の發展の順序であるから、簡單な一經を基として餘地の經典を批判し、以てその成立の新古を決定せんとする傾向にあつたといへるであらう。

本書の著者はかゝる傾向にある經典史觀に慊らず、全く新しい經典史觀——「經典の異譯の諸經、或は傳持を異にせる阿含・尼柯耶の諸經を同一思想の下に於て論ずる仕方に對して同意することは出來ない。」「今日、人々が等同とせられる諸經に於て、全く一致せる經典といふものは殆どない。そこには、說法の條項の增減があつたり、其の說き方が相違したり、經句の參差があり、或は語句の意味する所が違つてゐたりして、其等を味讀

することによつて、それ〴〵の經の滋味を味はひ得るものである」。そこに、「それ〴〵の特殊の經典が獨立して存在する理由が存するのであつて、一の經を中心として他の經を訂正・變改することを許さないものである。これは、經典は且く三寶の中佛寶を中心とする觀方よりいへば、それ〴〵を奉じ、傳燈相承せる教徒の受容智の記錄とも稱し得べきものであるからである。一經の全句、全語はそれを奉ずる佛徒の三寶の思想があるべきやうに表現せられてゐるのである。ある經典では、夫等の三寶中、一つが特別に經の表現を形作つてゐても、三寶の思想體系が總全的に有機的に關聯して一つの生命ある文學的作品を形作つてゐるのである。從つて妄りにその一語たりとも取り換へることの出來ないものである。若し不用意に取換へ、訂正することを敢えてすることになれば、その經典の持つてゐる生命を損ひ、かくて、その存在性を危くせしめることにもなるであらう。更に、異系統の等同の經典の思想體系の相違を明らかにして、兩者の經典のあるべき增減の意味を知つて、その上に於て諸種の經典成立に關する視點を參酌し、以てそれ〴〵歷史的に新古層が吟味せられねばならないであらう。」(八五—八六頁)——に基いて佛地經を研究し、以て、印度に於ける瑜伽唯識教學の諸系統より、支那に於ける唯識教學の諸系統への論理的な發展過程が具體的に論證せられてあるのであるが、その論證の中に、自らこの新しい經典史觀の獨斷にあらずして客觀的妥當性の存することを讀者は認めしめられるであらう。或は寧ろ何等の成心なく素直な心眼を以て經典を研究せられた結果、自らかゝる史觀に導き出されたものであると云つた方が好いかも知れない。

かゝる意味に於て、本書は學界に反省を求めしめ、以て一つの新しい方向へ學界を導き出さんとする如き野心的な著作と云つても過言ではないと思ふ。以下簡單に紹介を試みよう。

第二卷所收の「第一、佛地經の成立考」中、第一の論文に於ては、西藏譯安慧造大乘莊嚴經論の指示により、大乘莊嚴經論は佛地經等に基いて無着によつて集められたものであるから、佛地經の成立は無着以前なることが論證せられてゐる。第二の論文に於ては、解深密經の序分の成立は無着以前なること、又、西藏々經中に無着造として傳へられる解深密經疏が存するが、この疏は無着の著作と認容し得べきことが關係諸文獻によつて論證せられてある。而して、佛地經の序分と解深密經のそれとは等同であるから、以上の論證によりて間接的に佛地經の成立年代を無着以前に置かんとするものである。

今少しくこれを詳言せば、無着疏の第一品（この中には序品を含む。眞諦譯、西藏譯これに同じ。菩提流支譯、玄奘譯は序品を分品してゐる。）を和譯し、その序品に說かるゝ淨土の十八圓滿の相、佛・聲聞・菩薩の德讃嘆の句を關係諸資料卽ち玄奘譯佛地經論・戒賢造佛地經論・並に漢・藏譯の攝大乘論のそれと比較して異なる場合には直ちに會通を試みず、異つて傳持せ

られし理由を擧げ、以てそれ〴〵の經の存在の意義を與へ、次に、勝義の五相中、不可言相と無二相を說く一經句――眞諦譯にては「義」といはれ、その他の諸異譯では「事」とせられてゐる一字を如何に理解するかによつてそれ〴〵の經本の存在の意味を持つものなることを特に意を用ひて論じてある。卽ち、この「事」について圓測の疏には體事と事物と事義との三義のあることを擧げ、それら三義がまた圓測の疏によれば、體事と理解するは眞諦譯、事物と理解するは藏譯、事義と解するは菩提流支譯である。而して、玄奘譯は圓測では體事と理解せられてゐるが、次の法說・喩說に考へてこの「事」を以て依他起と解すべきであらうとなし、更に圓測の疏によつて、眞諦譯の解節經に於ては終始一貫して法性・眞如なる勝義諦の開說が關心事であつて世俗諦なる心意識相品の說かれざることをのべ、「而もそれで完全なる一經であり、爲に瑜伽系統といふよりも般若系統に近いものでさへあるやうである。」としてゐられる、之に反して玄奘譯の解深密經に於てはこの勝義諦の說明の中に次に來るべき世俗諦なる依他起相への說明が緣起の「事」として說かれてあることを注意し、從つて、解深密經と解節經とは外形的な相異ばかりでなく、內容に異質的な相異のあることが强調せられてある。

かくの如く各異譯はそれ〴〵異なる立場を有することを無着の疏によつて更に助成し、「是等の異系統のものはそれ〴〵異つた思想體系を持つてゐて、眞諦譯解節經は解節經として獨自の機構の下に組織されてゐるのである。それ故に眞諦譯の解節經の思想體系を持つものより玄奘譯の解深密經へと增廣したと觀る從來の本經に於ける經典成立史觀はこの意味で再出發せねばならないものであるまいか。」と結論してある。

「第二、唯識敎學に於ける佛地經の系統」。「第三、戒賢造佛地經論の研究」の二編に於ては、瑜伽唯識敎學には佛身觀に就いても四智所緣についても各三系統の存することを的示し、以て漢藏譯の二本の佛地經、及び、戒賢造佛地經論・親光專造佛地經論のその何れの系統に屬するかを論じてある。

その佛身觀の三系統とは、第一は十八圓滿の淨土を以て受用身・受用土とするもの、第二は變化身變化土とするものであつて、藏譯佛地經、及び戒賢の佛地經論はこの思想信仰の系統を基調として傳へるものなること、第三は受用變化二土同處說法とするもので、第一、第二の折衷說であり、漢譯の經・論はこれを宗とするものなることを論じ、次に四智所緣についての三系統とは、第一は十二處釋で、藏譯の經・論はこの系統に屬し、第二は十八界釋第一師、第三は十八界釋の第二師で漢譯の經・論はこの系統に屬し法相宗々義の基調をなしてゐると論ぜられてゐる。

第一卷所收の西藏原文は經・論共に北京版を底本としナルタン版・デルケ版の三本を對校々訂したものである。由來かゝる校訂といふ如き事業は一朝一夕にして成就するものではなく、

本當に根氣を要する難事業である。今回著者多年の勞苦によりて學術的不朽の事業が完成して茲に立派なテキストを得たることは著者自身の爲に慶賀すべきのみでなく、亦以て我が大學の學界に對し誇るに足るべきものであらう。而してその和譯は第二卷に收められて對讀するに便多く、又、その註記等に於ても著者の新しい史觀が窺はれ、西藏語索引と共に學界に稗益するところ大なるを信じて疑はない。(名古屋、破塵閣書房發行、定價九圓)。——野澤靜證——

小笠原秀實著

聖德太子の國家統制

眞宗講座第四回

非常時日本の國民生活の上に、特に、新體制の具現せんとする今日、本書の發刊をみたるは甚だ意義深きものがあると思ふ。蓋し聖德太子の十七憲法に顯れたる國家統制の根本義は、我が一千三百有餘年の歷史を指導した重要精神の一にして、長い歲月に於ける國民的發展の血肉となり、現在も亦それに依つて「護持養育」せられ、又將來も太子の光益を蒙るものであると思考せられるが故である。

殊に國民的要望に應へて近衞首相を中心として、國家新體制の正に實現しつゝある今日、國家統制の理想は最も喫緊的關心事でなければならない。茲に於て長年「護持養育」せられたる聖德太子の憲法十七條にもられたる國家統制の指導的意義を今一應新しく考究する事は誠に意義ある事と思ふ。

元來十七條憲法は、それが重要性は認められつゝも、而もその表現が古代的簡朴であり、組織的でないが故に、往々その眞義が見失はれ一般的理解がやゝ朦朧性を帶び、遂にはそれが重要性についてさへ疑義を誘發する恐れ無しとしない。從つてこの朦朧性を拂拭し古代的含蓄に富む簡朴性を開示註釋し、隱れたる內容を明白にしてそれを綜合組織する事が著者に與へられたる任務であつた。

今本書を拜讀するにそれは全くすばらしき一大論文と云ふべきであらう。唯々著者の努力と辛苦の跡に感激するのみである。大體本書の內容は編を分つこと四、初めに研究の總論を序し、次に十七條の基本精神を考へ、更に進んで十七條の組織に及び終りに十七條の歷史的具體化を述べ、最後に憲法十七條全文を附錄せられてゐる。

以下聊か目次の一部を列擧し以て內容一般の例示としよう。

第一篇　序　說

第一章　歷史學の任務について

一　溫古知新

二　歷史的認識の三段階

三　歷史の反復性

四　知新の二義

五　研究の目的
第二章　聖德太子研究の文化學的意義（その一）
一　太子研究の重要性
二　重要性の四項目
三　（一）史料の確實
四　遺品の意味
五　修史の良心
六　史眼の適應性
七　文化價値
八　宗教的崇敬の對象
九　高德の敬慕
第三章　聖德太子研究の文化學的意義（その二）
一　（二）文化諸部門の包括
二　排中問質疑
三　解答の方法
四　標準の變遷
五　佛教の系統化
六　全系統の三要素
七　太子創建の文化的統一精神
第四章　聖德太子研究の文化學的意義（その三）
一　（三）國家的統制の成文化
二　十七條の統一的組織
三　十七條の組織に關する諸說
四　（四）太子の思想と現在
五　一千三百年間一貫せる太子の精神
六　歷史的重要期に於ける太子尊崇
七　世間道出世間道の融合
八　太子研究の重要性
第五章　佛教の受容（その一）（以下細目略）
第六章　佛教の受容（その二）
第七章　氏族制度の弊害と大化改新
第二編　憲法十七條に關する基本的考察
第一章　統制の規範
第二章　規制の實力
第三章　憲法に於ける敬神の精神（その一）
第四章　憲法に於ける敬神の精神（その二）
第五章　內性の悅樂——樂の精神
第三編　憲法十七條の組織
第一章　十七條の概觀
第二章　理想の標示
第三章　理想實現の思辨的根據
第四章　理想實現の實踐的秩序（その一）
第五章　理想實現の實踐的秩序（その二）
第六章　十七條組織の要約
第四編　憲法十七條の具表的發展
第一章　大化改新と憲法十七條

第二章　大寶令の根本規範と十七條
第三章　佛教發展の二樣式
第四章　「世間虛假唯佛是眞」の眞義
第五章　「和國ノ教主聖德皇」
第六章　結語——精神的自存力

右に依つて知られる如く、その叙述内容は組織的にして詳細を極め、叙述形式は逐次的である。而して、それが引用文は非常に多方面に渉り、萬全を期せられし、著者の用意の程が窺はれる。（眞宗講座第四回配本　定價壹圓貳拾錢）（K）

安井廣度著

眞宗概說

眞宗講座第五回

昔から概說乃至概論を書く樣になれば一人前の學者だと云はれる如く、その道に通達した上でなければなか〳〵十分なものを書く事は困難であらう。然も本講座の如く、純專門的でもなく、又純講話風でもなく、その中間を行かんとする、所謂手頃なものを書くといふ事は餘程經驗のある人でなければ一寸むつかしい仕事であらう。然るに今回長年實際的に或は布教に或は教壇に乃至は著述に十分なる御體驗と御造詣の深い、安井教授の「眞宗概說」が出版せられたといふ事は、慶ばしい限りである。

今本書を繙く時全くそれは現代人向きの「眞宗概說」にして、從來古い論題として取扱はれた問題をも新しく實際的に一般向きに解說せんと努められた苦心の跡を十分に窺ふ事が出來る。それについて特に師の關心せられた一二の點を、その刊行の辭について窺ふと左の如くである。「第一に眞宗に對する種々な誤解、例へば他力を依賴主義としたり、淨土往生を非人生的なこととしたり、佛の救ひを反道德的なことのやうに思つたりする、そういふ誤解を一掃して、夫等に深い宗教的な意味のあることを少しでも開顯したかつた。第二に、時局の折柄誰も彼も國家意識に燃えてゐる。それと眞宗の教義と如何に關係するかその點を明かにしたかつた。第三に「我々專門家の說明は兎角訓話に陷り博引傍證する嫌ひがあるから努めてその弊を避け、教義の本質的な意味を明かにせんと念じた」と云つてゐられる。從つてその内容も從來の「眞宗概說」と少々趣を異にし、實際的な點が多い、之はその目次についても十分に窺ふ事が出來る。

序說
一、生けるしるし
二、永　生
三、眞宗の立場
四、眞宗の成立
第一章　如來の攝化
一、阿彌陀佛とその淨土

二、「他力廻向」の妙旨
三、信と行
四、信仰の現世利益
五、往生・成佛
第二章　信者の一生
一、聞　法
二、入　信
三、信のすがた
四、信仰生活
第三章　皇法と眞宗
一、本佛の抑止
二、釋尊の悲化
三、皇法の規模
四、皇法と佛法

右について、之を師説に依ると、先づ「序説」に於て最も誤解の多い「後生の一大事」と云ふ語の意味を明かにし、眞宗、廣くいへば佛教が永生（後生）の問題を解決する教なることを注意し、次に宗祖親鸞聖人の佛教觀を判り易く叙述し、之に依つて讀者をして佛教（眞宗）が轉迷開悟を問題とすることと、之に對する解決法の一班を心得しめ、又自ら眞宗の地位をも明了ならしめんとしてゐられる。

次に眞宗の教義を二章に分け（之は「教行信證」の體裁に則つたものであると云はれてゐる。）

第一章を「如來の攝化」と題し、如何に我々凡夫を救ひ給ふかの過程を顯し、第二章を「信者の一生」と題して、我々凡夫の救はれて行く過程を述べられてゐる。そして、眞宗は凡て如來の本願を根據とするから、如來の攝化を叙するに、各項一々「本願の文」を掲げ、その願意を明かにしつゝ、如來攝化の跡を顧み、こゝに眞宗教義の一班を叙してゐられる。第二章では宗祖の入信を判然せしめんと努めてゐられる。

次に第三章「皇法と眞宗」を加へたのは、中興蓮如上人が眞宗を「王法と佛法」の二項に約された意味を顧み、宗祖親鸞聖人の上にもその意味のあることを確め、皇民としての立場から再び眞宗を概説したもので或は此章から先に讀んで、次に序説にかへり第一章第二章と移り讀んだ方が分りよいかとも思ふと言つてゐられる。以上殆んど師言を引用したが以て内容一般を察知せられ得た事と思ふ。

（眞宗講座第五回配本　定價壹圓貳拾錢）（K）

研究室彙報

眞宗學研究室

△眞　宗　學　會

○圖繪展觀並に講演